

2022年9月11日(日) 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 10章 46～52節

説教題：何をして欲しいのか

私が千葉の神学校に入学した時、36歳でした。そこは大学に併設されている研究機関という位置づけの学校でしたので、若い人が多く、肩身の狭い思いをしておりました。そんな中で、もう1人、36歳の神学生の方がおられ、とても仲良くして頂きました。彼にはビジョン(目標)があって、それは、インドに行って、貧しい人達に仕えたいというビジョンでした。しかし、難しいのです。ビザのことや、現地の協力団体のことや…。上手く行きそうになると、何かしらの問題が出て来て行き詰まってしまいます。しかし、彼はいつも「これはもう神様の御手の中にあることですから…」と言って、決して諦めないのです。私はそこに1年しかいませんでしたが、カナダに行った後、彼の支援団体からお便りを頂きました。彼がインドに行って、奉仕を始めた、というニュースレターでした。彼の諦めない信仰に、神様が見事に答えて下さったのです。彼が、ある日のチャペルで証しをした時、取り上げたのが、今日のバルテマイの箇所でした。彼の中でこの箇所は、彼のビジョンとも重なって特別な箇所だったのだと思います。それ以来、この箇所は、私にとってもなじみの深い箇所となりました。

さて、ガリラヤからエルサレムへの旅を続けて来られたイエス様は、いよいよユダヤの入り口の町エリコに来られました。エリコは、エルサレムから24km、古くから交通の要衝であった町です。ガリラヤからエルサレムを訪ねようとする人々は、エリコに一泊してエルサレムに入る身支度を整えてエルサレムに向かいました。またエリコは、エルサレムの神殿で働く祭司達が多く住んでいた町でもあります。過越しの祭りのこの時期、祭司達もエルサレムに向かいます。町も、周辺の街道も、賑やかな様子だったでしょう。そのエリコには、イエス様の到来を待ち望むようにして迎えた人達がありました。1人は「ルカ福音書」に登場するザアカイです。そしてもう1人が、ここに登場するバルテマイです。この箇所は、バルテマイとイエス様との交流の様子を通して信仰のメッセージを語ります。「内容」と「メッセージ」と2つのことを申し上げます。

1. 内容～バルテマイの癒し

バルテマイは、道端に座って物乞いをしていました。当時、盲人には、それ以外に生活を立てる方法はありませんでした。バルテマイは、エリコの町の門の所に座って、通りを行く人々の情けにすがって辛うじて生活を立てていたようです。辛い生活です。しかし、その彼にも一縷の希望が、期待が、ありました。それはメシア(キリスト)への期待です。「旧約」に預言されていました。「そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ」(イザヤ 35:5～6)。メシアが来る時の希望の預言です。彼は、風の噂に「イエスという人は、目の見えない人、口の利けない人を癒した」という話を聞いていたかも知れません。イエス様に一縷の希望を見たのです。

エリコに入られたイエスは、次の朝早くでしょうか、エリコを出て、エルサレムに向かおうとして、バルテマイの座っている門の所に近づいて来られました。そのことを聞いた彼は、イエスに向かって「ダビデの子よ」と叫び始めました。それはイエス様のことを、かつての理想の王ダビデの子孫として登場すると信じられていたメシアだ、と信じての信仰の叫びでした。いわば、彼の信仰の告白です。人々は、「うるさい」と思ったのか、「お前には関係のない方だ」と思ったのか、彼を黙らせようとしみます。しかし、バルテマイは諦めません、叫び続けます。「ダビデの子よ。私をあわれんでください」。すると、バルテマイの切実な叫びに、イエスは立ち止まられました。バルテマイの叫びは、祈りは、イエス様を立ち止まらせたのです。イエスは、彼に聞かれます。「わたしに何をしてほしいのか」(51)。彼は願いました。「先生。目が見えるようになることです」(51)。イエスは「あなたの信仰があなたを救ったのです」(52)と言われ、彼の目を癒されるのです。彼は

癒されました。癒された彼はどうしたのか。彼は「イエスの行かれる所について行った」(52)のです。

2. メッセージ～見るべきもの

この箇所は何を教えるのでしょうか。1 つは、バルテマイのイエス様に対する信仰、イエス様の力に対する信頼、それを語ろうとしていると思います。彼は「ダビデの子よ。私をあわれんでください」(48)と叫び続けました。当時の宗教の教師は、歩きながら教えました。イエス様も歩きながら群衆に教えておられたのかも知れません。だから群衆は、彼を黙らせようとしたのかも知れません。しかし彼は、黙らなかつた。「夢は捨てよう。諦めよう」。そう自分に言い聞かせて諦めることをしなかつたのです。「またの機会を待とう」と引き下がることもしなかつた。叫び続けたのです。

私は、もう 40 年前、ある癒しの集会に出席しました。説教者が最後に「癒しのお祈りをしますから、癒して欲しいと思う人は前に出て来て下さい」と言いました。しかし私は、出て行きませんでした。「なぜ前になかつたのだろう」と思い返してみると、気恥ずかしさもあつたのですが、結局は信じていなかつたのだと思います。信じていれば、「恥ずかしい」等と言っていないで前に出たはずですが。だから私は、彼の必死さにイエス様への信仰を見るのです。そしてその彼の願いが、祈りが、イエス様を立ち止まらせ、彼の願いを聞いて下さるようにしたのです。この箇所は、バルテマイの姿を通して「このイエスが、イエスを『主よ』と崇める私達に良くして下さらないはずはない。どのような困難からも解放して下さらないはずはない。諦めるな、願い続けなさい。イエスは憐れみ深い方だから」と語るのです。「イエス様(神様)は、運命さえ変えることが出来る方である」ということを信じて、祈り続けるように、励まそうとするのです。

しかし、それだけではないのです。この前の箇所では、ゼベダイの子ヤコブとヨハネがイエス様のところにやって来て、イエス様に願いました。イエスが「何をしてほしいのですか」(10:36)と言われると、2 人は言いました。「あなたの栄光の座で、ひとり先生の右に、ひとり左にすわらせて下さい」(10:37)。イエス様は、それに対して「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです」(10:38)と言われました。つまり、彼らは、肉の目は見えていたけど、信仰の目は見えていなかつたのです。恐らくバルテマイの話は、ヤコブとヨハネの話と対になっているのです。そして私達にも問いかけているのです。イエス様が「私に何をしてほしいのか」(51)と問われた時、あなたは何を願うのか。何を願えば良いのか。

こんな話があります。「ある男が神様に 3 つの願い事をして良いと言われ、願い事をしました。1 つ目は『神様、ハワイに行きたいです』。男はすぐにハワイに送られました。2 つ目は『神様、パイをたくさん食べたいのです』。男はすぐに食べきれないほどのパイを与えられました。気を良くした男は最後の願いをしました。『神様、最後のお願いです。私はもう 60 歳です。妻も年を取りました。どうか 20 歳若い奥さんと取り換えて下さい』。すると神様が言われました。『お前の願いは良く分かった。それでは目をつぶって。1、2、3…ハイ！目をあけて！』。男は 80 歳になっていました」。(ジョークです)。神様に 3 つの願いが出来るのに、この男の 3 つの願いごとでは残念です。イエス様が「わたしに何をしてほしいのか」と問われたら、私達は何を願うべきなのでしょう。

バルテマイは、イエス様について行きました。そしてエルサレムに行きました。そして、その開かれた目で何を見たのか。彼が見たのは「イエス様の十字架」です。彼が聞いたのは「イエス様の十字架上の叫び」です。エリコで彼がイエス様を求めて叫んだ、その叫びよりももっと激しくイエス様は叫ばれました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」(15:34)。そこには激しい絶望がありました。バルテマイは、自分の目が見えないことを絶望して、そしてイエスに叫びました。しかし彼は、彼の絶望よりも激しい絶望があつたこと、深い絶望があつたことを知りました。それは言葉を換えると「人が本当に恐れなければならないのは何なのか」、「人が本当に解き放たなければならないのは何からなのか」、それが見えたということです。バルテマイには「人間には『目が見えないということからの解放』以上の解放が必要である」ことが見えた

ということです。それは、私達が「滅び」に向かっているという事実であり、私達を「死」が捕らえようとしているという事実です。私達の人生は、どんな人でも、その危うさの上にあるのです。目が見えようが、目が不自由であろうが、等しくその恐ろしさの上にあるのです。そこから解放されなければならないのです。でも「イエス様の絶望の叫び」は、やがて「完了した」(ヨハネ 19:30)、「救いは成った」という勝利の言葉に変わります。そして、3日目の復活において、本当に勝利に変わります。「イエス様の叫びと勝利—(十字架の贖いと復活)」は、私達を「滅びと死」から解放放つのです。イエスに肉の目を開かれた彼は、でも肉の目ではない、霊の目で、それが見ることが出来たのではないかと思います。本当に意味でイエス様が多かったのです。それが「イエスの行かれる所について行った」(52)と書かれている深い意味ではないかと思います。

ある時、他宗教の方ですか、熱心に信心しておられる方と話をすることがあります。その方は「宗教とは安心だ」と言われました。私も同意します。しかし、「安心」とは何なのでしょう。私達の人生が「滅びと死」に向かう人生であるなら、どこに「真の安心」があるのでしょうか。「安心」とは、ただ「イエスの十字架の叫びと復活の勝利に包まれている人生」、「イエスの十字架と復活によって滅びと死から解放された人生」のことを言うのではないのでしょうか。それだけが一瞬も止まることなく「滅びと死」に向かっている私達に「真の安心」を与えるのではないのでしょうか。星野富弘さんの「おだまき」という詩があります。「いのちが一番大切だと思っていたころ、生きるのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った日、生きているのが嬉しかった」(星野富弘)。

「いのちより大切なもの」とは何か。自己流の解説はしませんが、でもこの詩のポイントは「生きているのが嬉しかった」という言葉だと思います。ここで「いのちより大切なもの」が「滅びと死からの解放」であるとするなら、「滅びと死からの解放」こそが、私達に「安心」、「生きているのが嬉しい」というもの—(生きる上での余裕のようなもの)—を与えるのではないのでしょうか。

もちろん、イエス様を信じ、「イエスの叫びと復活の勝利」で包まれる人生を歩めば、恐れがない、心配がない、悩みがない、ということではありません。聖書はそう言いません。しかし「ヨハネ 16章」でイエス様はこう言われます。「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(ヨハネ 16:33 新共同訳)。ここで「勇気を出しなさい」と訳されている言葉は、この49節の「心配しないでよい」(49)という言葉と同じ「タルセオー」という言葉の変化したものです。悩みはあります。試練はあります。しかしそれが「イエスの叫びと復活の勝利」に支えられている人生なら、それは、既に「滅びと死」から解放された人生なのです。必ず勝利に続く人生なのです。失望に終わることはないのです。だから、神様に励まされて「勇気」を出すことが出来るのです。立ち上がる事が出来るのです。

その意味で、私達が、天地を創造し、命を創造された方、救い主であられる方に求めるべきものは「死と滅びからの解放」だと思います。永遠の命の祝福だと思います。しかし、ここで私達は、「私にはそのことがもうちゃんと見えている」と言えるのでしょうか。私も、イエス様の十字架によって罪赦され、永遠の命を頂いて、天国に向かって歩いている、ということは信じています。しかしそれならば、本当に私の心の目は、イエス様の為して下さった御業の大きさをしっかりと受け止めているのか。私の心の目は、十字架によって引き入れられた神の国の現実、神の恵みの現実を見ているのか。信仰にとって何が大切なのか、どう生きることが神に喜ばれることなのか、神の国を生きる生き方を知っているのか。神がどのように人の世を治めておられるのか、その神のなさり方を見ているのか。数え上げて行けば、私は神様について、信仰について、信仰生活について、神と共に生きる生き方について、あまりにも盲目であると思わざるを得ないのです。目が開かれていないから、イエス様にしっかりついて行くことも出来ないのではないかと思います。

最近、このような幻を見せられました。私は、自分が抱えている現状について、納得出来ずに、神様に対して不平不満、文句を言うことが多いのです。しかし先日、フト見せられたのは、いつか神様が私の人生の1つ1つの事柄が持っていた真の意味を全部見せて下さった時、あんなに不平不

満を言い、文句を言っていた、そのことの中に、実は神の深い配慮と恵みが隠されていたことを見せられ、恥じ入る姿なのです。そのこと1つを取っても、私の心の目、信仰の目は盲目なのです。

しばらく前「ソウル・サーファー」の話をしました。その続きのような話ですが…。13歳のサーファーの少女が、サーフィンの練習中、左腕をサメに食いちぎられてしまいました。肩から下がごっそりもって行かれたのです。でも彼女は「ここにも—(いや、ここに)—神の計画ある」と言って、神の愛を疑わないのです。そして左腕の傷が癒されると直ぐにサーフィンを再開し、様々な大会に出場し、良い成績を残して行くのです。その彼女の姿は、マスメディアからも注目されました。「なぜ、あなたはそんなに明るく生きて行けるのか」という質問を受けます。彼女は答えるのです。「神が私を愛して下さっています。皆さん、神があなたを愛しておられます」。また、いろいろな所を訪問し、人々を励まし、神を証するようになりました。そのようにして、事故を通して神を証する機会が与えられたことを「神のお役に立ちたいという願いが実現した」と言って喜んで生きているのです。「神は、悪からでも善を造って下さる。神が最後は良くして下さい」と喜んで生きているのです。証しの中で、彼女が最後に引用した御言葉は「ローマ書8章28節」でした。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ8:28)。「万事益」、私も大好きな御言葉ですが、本当に彼女ほどの神への信頼を持って受け取っているのか、自分が問われました。つまり、見ているもの、見えているものが違うな、と思ったのです。本当に激しい苦しみから助け出された彼女には、神のなさり方が見えているような気がしました。

その意味で私達は、「死と滅びから解放」、「永遠の命の祝福」を願い求めると同時に、神様のなさり様を理解する心の目、神を信頼する信仰の目、神様のことをもっと知る心の目、神に喜ばれる信仰生活を選び取る信仰の目、そのようなものを、霊的な盲目からの解放を、求めて行かなければならないのではないのでしょうか。使徒パウロはエペソのクリスチャンのために祈りました。「あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるようになるように」(エペソ1:18~19)。心の目が開かれるように、神様のことを、信仰生活の恵みを、もっと深く知ることが出来るようにと祈りました。千葉の神学校に通っていた時、校長先生と祈祷会を御一緒すると、良く「私の霊性が守られるように祈って下さい」と言われました。「神の目に相応しい信仰生活、神のなさり様を見ることの出来る霊性」を求めておられたのだらうと思います。この「エペソ書」の祈りを、私達も自分の祈りとして、もっと深い信仰生活を、もっと神様に近づく信仰生活を、もっと天国をはっきりと見据える信仰生活を求めて行きたいと願うことです。